

第3回中間報告

(報告期間2017年12月31日～2018年3月30日)

基本情報

派遣クラブ：広島西ロータリークラブ
カウンセラー：加藤 博基 氏
受入ホストクラブ：Rotary Club of Brighton & Hove Soiree
カウンセラー：Chris Wellings

国際ロータリー第2710地区
2017-2018年度グローバル補助金奨学生
藤原周平

報告書提出日：2018年3月30日

E-mail：shujkl@gmail.com
連絡先電話番号：+44 7754 756 824
教育機関・専攻分野：サセックス大学大学院
国際教育と開発専攻（修士課程）
University of Sussex
MA in International Education and Development

目次

1. 学業面での成果
2. 受入地区でのロータリーとの関わり、奉仕活動、カウンセラーとの交流
3. 直面した課題、問題点等
4. 今後の課題、目標
5. その他特記事項

1. 学業面での成果

3点あります。1点目は、英語での学術的なエッセイや論文の書き方を身につけることができたことです。秋学期の課題提出が1月中旬に終了し、「国際教育と開発の理論」の授業で4000字、「国際教育と開発の政策」の授業で2000字の研究課題の結果が出ました。評価及びフィードバックを確認しながら、エッセイを書く上でどのような点に気をつける必要があるのか以前よりも深く理解できたと考えています。春学期の課題では、秋学期よりも質の高いエッセイを書き上げることができると思います。

2点目は、修士論文を書くために必要な研究手法や注意すべき観点を学んだことです。研究手法に関しては、アンケート、観察やインタビューなどの手法をどのように計画立案するか、収集した情報をどのように分析するかについて学びました。例えば、インタビューを用いて研究を行う場合、誰がインタビューを行うのか、誰にどのような意図でどのような質問をするのか、研究者としての自身の立ち位置をどのように認識するのかなど、様々な考慮すべき事項があります。これらは、インタビューで得られる情報の質に直接的に関わってくるため、非常に重要です。また研究を行う上で一貫して注意すべき点として、倫理的な事項を学びました。できる限り、倫理的に問題がない研究を行うために、自身の研究内容に応じて、対応が必要になります。例えば、18歳未満の子供に対して、親の許可を得ることなくインタビューを実施することは、倫理的に問題がある可能性が非常に高いです。このように、自身の研究をより信頼性のある内容にするために、考慮すべき様々な観点を学ぶことができたのは、大きな成果であると思います。

最後に、2月上旬から春学期が始まり、新しい内容を学ぶようになりましたが、選択科目として、「教育と紛争のグローバルガバナンス」を選択し、教育と紛争の関係についての理解を深めています。近年、国内紛争で苦しんでいる開発途上国が多く、国内の教育システムに深刻な影響を与えています。紛争が起こる原因、紛争による教育システムへの影響、紛争予防のための教育システム、紛争後の復興のための教育システムのあり方などについて学ぶことで、基本的教育の向上に貢献することができると思います。

2. 受入地区でのロータリーとの関わり、奉仕活動、カウンセラーとの交流

今回の報告期間内で、受け入れ地区の方々との交流はありませんでした。修士論文の内容について、様々な可能性を探ることに集中していたためです。次回のご報告では、幾つかの交流について書くことができると思います。

3. 直面した課題、問題点等

大きく2点あります。1点目は、修士論文の内容を決定することが大きな課題でした。興味のある題目は多くありましたが、指導教員との相談した結果、教育と紛争の関係について修士論文で書くことに決めました。具体的には、ナイジェリア北部のボコハラムという武装組織に焦点を当て、彼らがどのような論理で武器を持って立ち上がり、なぜ教育機関を攻撃するのか、そして教育システムはどのような影

響を受けているのかについて研究する予定です。なお、ボコハラムという言葉は、現地の言語であるハウサ語で「西洋の教育は罪」という意味になります。近年、紛争により国内の教育システムは深刻な影響を受けている開発途上国が多くあるということは、学業面の成果で言及しました。実際に、ナイジェリア北部では、ボコハラムによって、学校は、燃やされる、破壊される、又は略奪されるといった攻撃を受けています。さらに、学校の生徒が誘拐される、学校が武器庫として使用されることも起こっています。結果として、100万人近い子供達がもはや学校へ行くことができなくなり、教育機会を奪われているという現実があります。このように、武装組織による教育への攻撃は、全ての子供達が教育を受けるといった国際的な目標を達成するのに、主要な障壁となっています。そのため、題目として重要度や関心度も高く、研究する価値のある内容であると考え、決定しました。世界中で様々な武装組織が教育への攻撃を行っている中で、ナイジェリア北部のボコハラムという武装組織に焦点を当てた理由は、本修士課程卒業後、国連児童基金のカメルーンカントリーオフィスにて、インターンシップとして働く機会が得られたためです。ボコハラムはカメルーン北部においても活動しており、カメルーンでの職務遂行に役立つと考えました。

2点目は、受けられるはずの授業が約3週間提供されなかったことが大きな問題でした。というのは、イギリス国内の多くの大学で、2月下旬から3月中旬までの約3週間、教職員労働組合による授業のストライキが行われたためです。サセックス大学も例外ではなく、多くの教授がこのストライキに参加したため、殆どの学生が授業を受けることができない状態に陥りました。これは、大学側が大学職員の退職後の年金減額を決定したことに対して、教職員労働組合が抗議を目的に起こしたもので、イギリス国内のニュースや新聞でも大きく取り上げられました。ストライキ期間中、本来受けられるはずの授業が中止となっただけでなく、教授と相談ができない、教授や学生によるデモ行進が行われ、その影響でバスが大学キャンパス内まで来ないなどの不便を被り、個人的には非常に不快な思いをしました。このような出来事に遭遇することは滅多になく、良い経験と考え、今後も出来ることを前向きに取り組んでいこうという気持ちになれるよう努めています。

4. 今後の課題、目標

修士論文を書くにあたって、どのような理論を使用するかを考え、論理を構築することが直近の課題です。ナイジェリア北部の武装組織であるボコハラムが起こった背景として、どのような理論を用いてその現象を説明するのかについて、文献を整理しながら論理を構築しています。修士論文作成にあたってのより詳細を記した提案書の提出は、5月上旬で、まだ時間がありますので、丁寧に文献を読みながら一つ一つ進めていければと思います。

5. その他特記事項

ストライキに対する学生側からの抗議として、私のコース内の学生約50名で、ストライキについてどのように感じているかを共有し合い、それらを集約、要約したものを教職員、部門、そして大学に提出することを現在、生徒委員長の役割として進めています。大学と大学に所属する教職員の対立という構図の中で、学生は蚊帳の外に置かれ、我々がどのように感じているか大学及び大学内の教職員に伝わっていないと感じていましたので、良い機会と思い、積極的に関わっています。多くのコースメイトは、ストライキについて不満があるものの、その不満を表現する場は限られていて、大学は何も行動を起こしていないのが現状です。コースメイトの考えをまとめ、コースメイト全員の考えを反映する意見書として、学生側の考えを表明し、学生にとって何か有益な行動を大学側から引き出すなど、何か現実的に積極的な影響を与えることができればと思います。